
東京マグニチュード8.0二次創作 「初挑戦」

機械科ボイラーズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東京マグニチュード8.0 二次創作 「初挑戦」

【Nコード】

N9229K

【作者名】

機械科ボイラーズ

【あらすじ】

本編から四年後、悠貴が生きているという設定の平行ワールドの話です。

(前書き)

本編から四年後、悠貴が生きているという設定の平行ワールドの話です。

「あ、悠貴！ おかえり〜」

学校から帰宅した悠貴を出迎える未来。なんだかいつもよりテンションが高い。四年前の地震以来、未来は以前よりずいぶん悠貴に優しく接するようになった。

以前の未来は帰宅の挨拶もおろそかにするような性格だったのだが、あの日を境に家族に対する挨拶を欠かしていない。悠貴に対しては構い過ぎるぐらい構っているぐらいだ。ただ、そのことを差し引いても、今日の未来はテンションが高めだった。

何か企んでいるのだろうか。少しだけ警戒心を抱きつつ未来を観察すると、どうやら後ろ手に何か隠しているようだった。

「あ、うん。ただいま」

「へっへー、悠貴ー。いいものあげようか？」

未来の様子は楽しげだ。正直言って、不気味だと思う。友達からは、「お前の姉ちゃん、ブラコン？」などと言われる始末だった。もちろん最初は姉の変化は素直に嬉しかったのだけれど、小学生の頃ならともかく、悠貴ももう中学生である。家の中にいると隙を見ては抱きついてくるし、いい加減弟との距離に気を使ってくれても良いんじゃないかと思う今日この頃だった。

「……何？」

「じゃーん！」

未来が見せたのは、手編みのものとおぼしき毛糸のマフラーだった。

「そろそろ寒くなってくるからね、悠貴にあげようと思って真理さんに教わって編んでたんだー」

「最近あんまりウチにいないと思ってたら、そんなことやってたんだ。てっきりまたテストの補習受けてるのかと思ってた」

「ちよっ、しっ、失礼ね！ あたしそんな毎回補習受けるほど頭悪くないもん！」

悠貴の冷めた返答に憤慨する未来。最近の悠貴はこんな調子だった。小学生の頃はこんな皮肉を言う子じゃなかったのに。姉として少し悲しい。

「お姉ちゃんさ、『もん』とか言うのいい加減やめたら？ 子供じゃないんだから。」

「もういい歳でしょ」

「っ、もおおおおっ、ほんとにアツタマくるわねー、かわいくなーい！」

花の女子高生に向かってそういうこと言う、フツー！？」

悠貴は姉の手編みのマフラーなどには全く関心のない様子で、冷蔵庫の中身などを漁っている。めばしいものは何もないと悟ると、冷蔵庫をパタンと閉じて、スタスタと自分の部屋に向かって歩き出した。

「ゆ、悠貴！ ちょっと待ってよ！ マフラー巻いて見せてよ、絶対似合うから！」

あわてて悠貴を引きとめる未来だが、悠貴の態度は相変わらずそっけない。

「えー、いいよ、いらないよー」

「悠貴、冷たい……お姉ちゃんの、せっかくの編み物初挑戦なのに」
「だって恥ずかしいよ、そんな赤いマフラー巻いて学校行けないよ、
恥ずかしくて
外歩けないよ」

確かに言われてみると、男の子に赤はなかったかもしれない。姉
バカ視点で深くは考えていなかったのだが。真理さんも、全然気に
してなかったし……こういうところは抜けてるんだよね、あの人
……などと、真理に小さく逆恨みする未来だった。

「う……、そ、そうかなあ……そんなに恥ずかしいかなあ……」

すっかり自信をなくした様子で、しょんぼりと肩を落とす未来。
ここにきて、ちょっと言い過ぎたかな、とバツの悪い表情を見せる
悠貴だが、未来にはそんな悠貴の表情に気が付いている様子はな
かった。

「……セーターとかなら良かったのかも」

「え？」

ボソツとつぶやく悠貴に、未来が反応する。

「いや、だから、セーターとかなら、ウチの中だけでなら、着て
も、別に恥ずかしくないからさ」

それを聞いて、表情に明るさを取り戻す未来。

「そっか！ そうだね！ ウチの中なら恥ずかしくないもんね！
わかった！

今度はセーターにするね！ お姉ちゃんまた頑張って編んであげるからね！」

「いや、そっちの方がマシって言うただけで、別に欲しいとか言っていないから！」

「もおお、照れちゃって、ほんととかいいなあ、悠貴は」
「だーっ！ いちいちくつつかないでよ！ 鬱陶しいなあ、ホントにもう！」

スキンシップを求める姉をなんとか振り払い、自室にこもってバタン！と音を立てて戸を閉める悠貴。居間に取り残されて、一人寂しげに佇む未来だった。

「はあ……ちっちゃい頃はお姉ちゃんお姉ちゃんて、かわいかったのになあ……」

ソファーに腰をおろしつつ、小学生の頃の悠貴を思い起こし、アソビな気分に戻ったりしてみる。確かに自分でもちよっと構い過ぎかもしれない、とは思う。

お台場から帰ってきたあの日から、「優しい良いお姉ちゃんになるう」って決めたけど、どんなお姉ちゃんが「良いお姉ちゃん」なのか、今でもよくわからない。

そろそろ、構い過ぎない方が良い時期なのかな。
一人で悩んだり、一人で考えたり。
悠貴にも、そういう時間が必要な時期なのかな。

ねえ、悠貴。あたし、良いお姉ちゃん、ちゃんと出来てるかな？

唐突に、ふと、思い出したことがあった。

「……あれ。そういえば、マフラー、ない。……あれ？ あれ？
やだ。マフラー、どこいったの！？ マフラー、どこおおお！？」

一方、自室の悠貴は、ベッドの上に仰向けになって、姉の手編みのマフラーを手に取って眺めていた。どう見ても編み目が粗い。どう考えてもあの姉に、こういう地味な手作業が得意とは思えない。しまったく、これを完成させるのにどのぐらい時間をかけたのやら。

「……ヘタクソ」

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9229k/>

東京マグニチュード8.0二次創作 「初挑戦」

2010年12月14日21時08分発行